

島前高校ヒトツナギ部

ヒトツナギ部との交流では、高校生のプレゼンに対し大学生が助言していくといった形のものであった。また地域民を交えての今後の在り方を模索していくものであった。ツナギ部の活動というのが、島の魅力を伝えるため外部の人へ向けた観光プランである。主軸は、学生であり地域の人を巻き込みながら島の魅力、特に島の人の魅力を伝えるといったものであった。現状は、ヒトツナギの活動は続いているが形だけのものになっているという問題点が挙げられた。なぜこのような問題があがったかという、受け継がれてきているヒトツナギがプログラム化され、マニュアル化し効率化しているからではないか、このことで地域の人を頼ることが減ってきたからではないだろうかという意見がもたれた。ヒトツナギを上級生から聞き、頭では理解しているが思いが継承されているのかなどからこの問題がみえてきた。ヒトツナギ最初の頃のメンバーである、近藤さんの話を高校生が聞くことで思いの継承は多少なりともされたのではないだろうか。地域の人との関係が希薄化してきている現状をふまえ、ヒトツナギ部、大学生、地域民を踏まえ意見交換の場を設けた。そこでは、初期メンバーがつくったパワーポイントの発表と、今回のヒトツナギを振り返っての反省と今後の展望を高校生が一人ひとり自分の言葉で地域民へ伝えた。その後意見交換の場をつくり高校生と地域民を直接つなぎ話し合いが行われた。地域民の意見としては、知識の共有不足、人とつながることの思いを伝える時間の不足、どういった活動にしたいのかなど、時折きつい言葉もみられた。中学生には、少し強い口調の人もいたが、それだけ地域民がヒトツナギに対して本気であることが伝わってきた。高校生は、地域民の話すことを必死にメモし、次に生かそうとする姿が見れた。船場まで案内をする際に地域民と話す機会があったが、「このような機会がもててよかった」「高校生の気持ちを知れてよかった」など、この活動の良さを感じた。私がこの活動をとって感じたことは、学生以上に地域民はヒトツナギに対し、思いがあるということである。学生主体ではあるが、地域民は、この活動に対しなにかしたい、なにかをしてあげたいという気持ちが強くあるのだと思う。学生主体ではあるが、地域民が支えとなってくれるということは今以上に中学生には知ってほしいと思った。地域民からの意見や訴え、要望というのは年々増していくものである。よりよいものを目指すうえでこれは仕方のないことだ。それをプレッシャーと感じず、期待されている、それだけ本気で考えてくれているとプラスに考えていってほしい。このヒトツナギの活動は本当に素晴らしいものだと思う。地域の魅力をつたえるために学生主体でおこなっているところは他を探しても少ないことだろう。それだけオリジナリティがありかつ魅力のあるこのプロジェクトを今後も引き続きおこなっていき、後輩へ伝えていってほしいと思う。

西島中学校 3 年生

西島中学校では、中学 3 年生と交流をさせていただいた。こちら中学生と交流する機会はありませんので新鮮な機会となった。島に、大学がないということで大人ではないが大人に近い存在であり、かつ自分たちともあまり歳の離れていない人と関わるという中学

生からしても刺激のある機会となったのではないだろうか。内容は、中学生と3人1組となり中学生が大学生へ質問し、のちに大学生を紹介するといったものであった。最初は中学生は緊張していたのか、あまり会話の進まない状態が進んでいた。こちらから話題を提供し、あとで発表しやすいような聞かせ方をしていった。なかでも、中学生は恋に関してすごく敏感で、私も2番目に聞かれた質問が彼女はあるのかという質問だった。短い時間ではあったが、自分達の知らない存在である大学生と関わった中学生にもそれぞれなにか得るものや刺激があったことだろう。私はこの活動を通し、自分の研究している分野を再確認できたし、していてよかったなという感情がもてた。コミュニティを形成していくうえで、人間の綺麗な部分と汚い部分が見え隠れしていたことが続いていた中で、このように純粋な中学生と出会うことができ自分の中で気持ちの整理ができた。中学生に与えたものは少なかったかもしれないが私は中学生から得たものは多くありました。今後も自分のしたいことを模索し、それに向かっていろんな経験をしていい人になってほしいと思う。貴重な時間をありがとうございました。

隠岐國学習センター夢ゼミ

隠岐國学習センターでは、高校1年生と共に夢ゼミに参加させていただいた。学習センター長の豊田さんの導入から始まった夢ゼミは、私が高校のときには体験したことのないようなものだった。その日の内容は、今自分のWANT(したいこと)をだし、今CAN(できること)をあげ、それが地域からのNEED(要望)と重なるものを見つけ出すというものだった。立命館大学生も交え、3人一組程度でグループ作業を行っていった。島前高校にきている子は、一人ひとりなにしたいかがとても明確でWANTに関してはたくさんでしていた。これをしたいのだがどうしたらいいのか、これって本当にいいことなのかなど大学生に質問している姿が多くみられた。CANの段階でも、今自分にできることがわかっていて問題なく進んでいた。しかし、NEEDの段階に入ると手が止まっていた。今、地域の人、周りの人はなにを求めているのか、また自分がなにを求められているのかが理解できていない状態だった。おそらくまだ自分のことを客観視できていないからだと思う。またWANTとCANに重なるところばかりを探してしまう子もいてまったくでてこなくなっている様子も伺えた。高校1年生にしてはなかなか難しいことをしているなというのが率直な感想であった。しかし、この歳でこのような活動ができていることはとてもうらやましいし素晴らしいことであると思う。私はこの活動を通して、自分のことも考えることができた。私はどちらかというと、WANTがあまり出てこなく、CANとNEEDが多くでてきた。役職上、NEEDは必然的に大きくなっていくので多く出てきたが、WANTがあまりでてこなかった。要するに、与えられたものはこなしているが、夢がないということかもしれない。中高と主将をつとめ、大学でもゼミ長をしていくと、あまり自分の欲を出す機会がなくまとめあげたりといったものばかりに力を注いでしまっていたのかなと感じた。私が昔から想っていたことは、自分のコミュニティの輪を広げたいといったものである。今は、全国各地に行き、自分の考えとあっているひと、まったく逆の人、またそのどちらでもな

い人など多くの人と会うことで様々な刺激を得ている。なにがあるわけでもないが、これが自分の将来になにかしらの影響を生むのではないかと思っている。今回の島前プロジェクトでも多くの人と関わることができた。単発的な関わりではなく、一生付き合っていける関係を全国各地につくっていきたい。この夢ゼミは、さまざまな視点から生徒に刺激を与えていけるまさに夢のようなものである。高校生は、この夢ゼミを最大限に活用し、大学に入ったとき、また就職したときに一步リードした状態で始めることができるということをしてほしい。また島前高校生として、いろいろな場所で人を引っ張って行ってほしいと思う。今回はこのような活動に参加させていただきありがとうございました。